

生活保護基準の検証について

厚生労働省社会・援護局保護課

- 隣接十分位間の世帯の消費の統計解析 p 2
- 第 3 ・ 五分位に対する第 1 ・ 十分位
の消費水準について p 4

隣接十分位間の世帯の消費の統計解析

1. 夫婦と18歳未満の子1人からなる有業世帯の場合の生活扶助相当支出の分散分析

- 夫婦と18歳未満の子1人からなる有業世帯の第5・十分位以下の各世帯年収第1・十分位における生活扶助相当支出をみると、下の分位ほど生活扶助相当支出が低い状況が見られるが、分散分析によりこの有意差の度合いをみたところ、次のようになる。

分析対象	F 値
第1・十分位と第2・十分位の間	31.3
第2・十分位と第3・十分位の間	10.0
第3・十分位と第4・十分位の間	2.5
第4・十分位と第5・十分位の間	6.7

- 上の表におけるF値（違いの程度を表す尺度。数値が大きいほど違いが大きい）は、隣接十分位間の生活扶助相当支出の有意差の程度を表している。この結果によれば、第1・十分位と第2・十分位の間で消費の変化が一番大きい状況が認められる。

※ 分散分析とは、複数のグループの平均値に統計的に有意な差（データのばらつきを考慮した上での平均の差）がどの程度あるかどうかを分析するための手法。

2. 全世帯の生活扶助相当支出に関する計量分析

- 全世帯を分析対象とする場合は、消費水準に世帯人員などの影響があることから、第1・十分位と第2・十分位の間で消費に一番大きな変化があるかをみるためには、消費に影響を与える諸要素をコントロールする必要がある。そこで、級地間較差の検証において定式化した生活扶助相当支出に関する回帰式を第1～第5の各十分位において推定した結果を用いて、回帰式の構造変化に関する検定（いわゆるChow test）を行う。

この方法を用いて隣接十分位間の回帰式の構造変化の有意差の度合いをみたところ、次のようになった。

分析対象	F 値
第1・十分位と第2・十分位の間	25.9
第2・十分位と第3・十分位の間	11.9
第3・十分位と第4・十分位の間	14.0
第4・十分位と第5・十分位の間	7.8

- 上の表におけるF値は、隣接十分位間の生活扶助相当支出の回帰式の係数全体としての有意差の程度を表している。この結果によれば、全世帯の場合についても第1・十分位と第2・十分位の間で消費の変化が一番大きい状況が認められる。

※ Chow testとは、消費を回帰分析した結果に基づいて隣り合う各十分位間の消費に有意な差があるかどうかを分析する手法。

第3・五分位に対する第1・十分位の消費水準について

各十分位及び各五分位別に消費水準を比較すると、第1・十分位の消費水準は、平均的な所得階層である第3・五分位の消費水準の約6割に達している。

世帯類型	第1・十分位の生活扶助相当支出 ／第3・五分位の生活扶助相当支出
20～59歳の単身有業世帯	68%
60歳以上の単身世帯	64%
60歳以上の夫婦世帯	62%
夫婦と18歳未満の子1人の有業世帯	66%
夫婦と18歳未満の子2人の有業世帯	71%